

甲虫ニュース

No. 97 March 1992

COLEOPTERISTS' NEWS

日本産マンマルコガネ科概説

越智輝雄

はじめに 近年、琉球諸島では動物相の調査が進み、イリオモテヤマネコ、ヤンバルクイナ、ヤンバルテナゴコガネに代表される遺存種の発見が相次いだ。このような種の発見は、この地域が単に豊かな生物相を包含しているという事実だけでなく、琉球諸島の地史を考察する上においても貴重な研究資料を提供してくれる。

最近、この琉球諸島で発見され、それまでは日本未記録であったマンマルコガネ科甲虫類もこうした研究に大いに役立つものと思われる。しかし発見されまだ間もないので一般になじみが薄く、未知の部分も多いので、マンマルコガネとは一体どういう甲虫なのか、本稿でその一端を紹介してみたい。

概説 マンマルコガネ科 Ceratocanthidae は、コガネムシ上科に位置し、成虫の腹節は5節であることからコブスジコガネ科あるいはコガネムシ科の一亜科として取り扱われてきた。しかし、その特異な形態から、PAULIAN (1945) や幼虫形態も含めて分類した CROWSON (1967)、さらに詳細に系統分類した IABLOKOFF-KHUNZORIAN (1977) は独立の科として認め、PAULIAN (1977) がアフリカ産マンマルコガネのモノグラフを出版して以来、この扱いは定着している。

この仲間は熱帯を中心に分布し、旧北区を除く全世界から32属約250種が記載されており、琉球諸島を含む東洋区には6属約50種が分布している。日本からは1属2種が知られており、久松(1987)が石垣島からこの科の種類を紹介したのが日本で最初の報告である。ほぼ同時に大阪大学生物研究会(1987)はトカラ列島中之島におけるマンマルコガネの生態を報告し、その標本を基にして OCHI, JOHKI & NAKATA (1990) によって *Madrasostes*

kazumai が記載され、さらに OCHI (1990) により *M. hisamatsui* が石垣、西表両島から記載された。

この科の甲虫の特異な点は、ダンゴムシのように刺激を受けると体を丸め完全に球状にする習性を持っていることである。その際、アリなどの捕食性昆虫の攻撃を受けないように、口器や触角、付節などの的になりやすい突出物は頭部、前胸背、上翅や幅広い脛節の内側に収納され完璧に保護されるようになっている。しかし、この甲虫は体を球状にする機能を獲得したためか、他の甲虫のように体を真っ直ぐに伸ばすという機能を退化させてしまっている。前胸背と上翅の角度はせいぜい60度くらいにしか開くことができず、歩行の際においても40度くらいである。この体を丸くするという習性は、この甲虫が生息場所ですぐに出会うことの多いシロアリや捕食性の高い熱帯のアリから身を護る上で重要な意味をもっているように思われる。

生態 生態についてはまだ分からないことが多いが、一般にマンマルコガネは熱帯地方の森林に生息し、南北アメリカでは温帯地域にもいくらかの種類が見られる。分布の中心となる熱帯でも砂漠のような樹木の生えない乾燥地域には分布しない。成虫・幼

虫ともに森林の林床の朽木から見出されることが多く、とくに成虫は倒木の樹皮下から採集される。幼虫は主にシロアリの巣の廃棄部に見られる赤褐色粘土状部分を食している。成虫が何を食しているのかはよく分かっていないが、日本産の種類については口器の構造や消化器官内に内容物があまり見られないことから水分の補給に止まっている可能性もあり、今後の研究課題である。岩田・他(1990)によれば、トカラ列島の種類がイエシロアリ *Coptotermes formosanus* SHIRAKI のコロニーの宿ったタブノキ

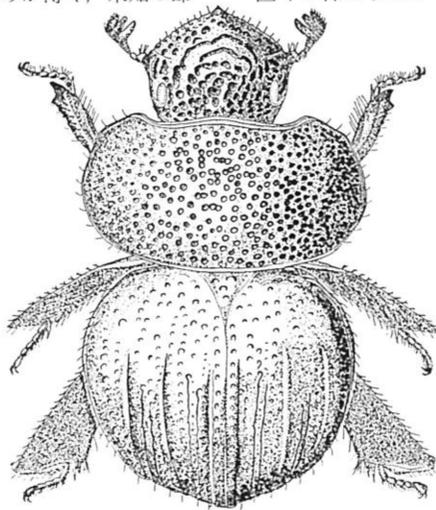


図1. *Madrasostes hisamatsui* OCHI サキシママンマルコガネ

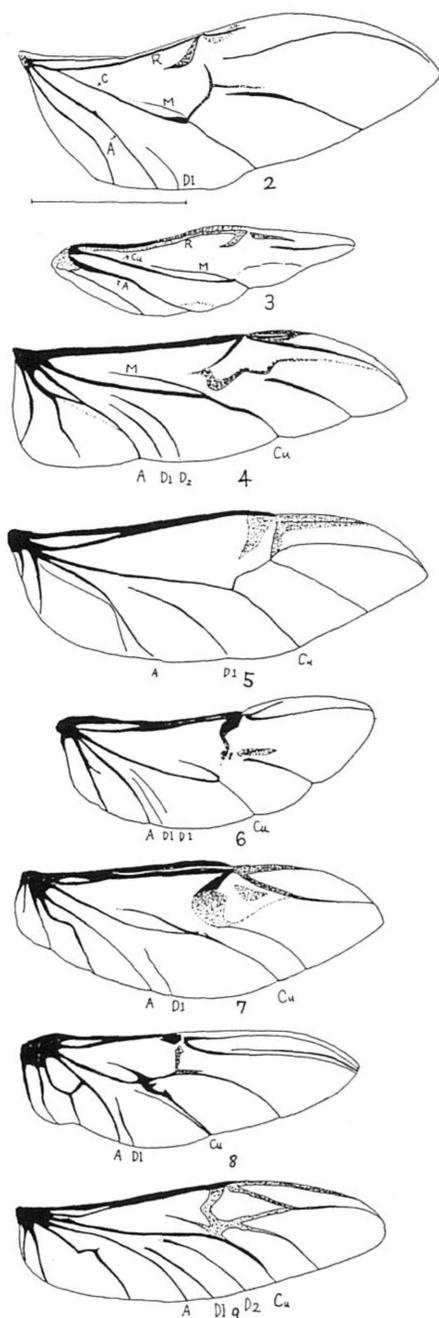


図2~9. 後翅脈 (スケールは2mm, 2・3のみ適用).
 2: *Pterorthocetes* sp. (from Malaysia); 3: サキシ
 ママンマルコガネ; 4: ミヤマクワガタ; 5: クロツ
 ヤムシ; 6: ヒメコブスジコガネ; 7: フチトリアツ
 バコガネ; 8: ゴホンダイコクコガネ; 9: センチコ
 ガネ.

の倒木の巣廃棄部の赤褐色粘土状部から幼虫が見つかり、飼育下においても腐朽した木屑を食して生育することが観察されている。成虫は飼育下では越冬することも確認されており、1年近く生育するようである。先島諸島の種類については、森林内の朽木の樹皮下や、朽ちた倒木の下から成・幼虫ともに見出だされている。西表島では、アリの巣を崩してベルレーゼにかけた資料の中からも成虫が見つかり、その生態についてはさらに詳しい調査が望まれる。北米でも朽木(カシ, ニレ, ヒッコリー等)から見出だされ、*Cloetotus* 属幼虫の食餌は枯れた木の腐食部位であることが知られている。興味深いことに、北米産の *Cloetotus* 属の種類は、朽木だけでなく腐肉からも採集される。また、*Ceratocanthus volvox* (ERICHSON) が花でも見られることが報告されており、金属光沢の強い種類であることから、昼行性を示唆するような体色と花に来るとい習性に関連があるかも知れない。また、東南アジアにも *Eusphaelopeltis* 属や *Eubrittoniella* 属のように金属光沢の強い種類が多く、筆者の手許にある *Eusphaelopeltis* 属の一種も日中、生葉のビーティングで採集されているので、成虫は北米産の *Ceratocanthus* 属と似た生態をしているかも知れない。中米のドミニカでは、*Cloetotus allogeri* PAULIAN が熱帯多雨林内の乾いた木性シダ類のビーティングや樹木の下、あるいは枯れ葉をふるいにかける方法により採集された記録がある。南米のブラジルでは、好シロアリ性昆虫としてマンマルコガネの一種が報告されている。アフリカからも記録があり、同様に幼虫の食餌は朽木であることが述べられている。東南アジアからも若干の記録があり、ジャワでは、*Pterorthocetes insularis* GESTRO の成虫が紅茶のプランテーションのために伐採された原生林跡地で、シロアリの巣がある切り株の樹皮下から多数見出だされたことが記されている。筆者自身もボルネオのケニンガウ(サバ州)で、かなり朽ちたゴムの倒木の樹皮下に朽木食性ゴキブリの糞が詰まった中から *Pterorthocetes* 属の種類を多数採集している。また、ボルネオではクロツヤムシの食痕中からもマンマルコガネの仲間が見つかり、少なくとも東南アジアでは、本科甲虫の幼虫がシロアリの作る赤褐色粘土状部を食する以外に朽木の中のゴキブリやクロツヤムシの分解物質を食しているようである。成虫の大顎には内葉を具えるが、これは食植性のもので見られる特徴とされており、本科の甲虫の食性を考察する上においても重要な特徴である。

飛行に関しては、筆者の調べた東南アジアの種類では全て後翅が通常の形態(図2)をしているので、飛行できることは容易に想像できる。事実、ボルネオでは日本産と同じ属の *Madrasostes* の種類が燈火に飛来し、飛び回っている様子が観察されている(荒谷氏私信)。しかし、日本産の種類(図3)は図でも分かるように後翅が明らかに退化しており、飛行は不可能と思われる。これに関しては、種々の推論

が成り立つが、両種とも海からの風の影響を受けやすい比較的小さい島に生息しており、気象条件により舞い上がった際に風で海に運ばれる可能性も考えられ、種族保存のためにこのように後翅が退化したのかも知れない。

分類 マンマルコガネ科は見かけ上の腹節が5節(図15)であるという根拠により LACORDAIRE (1856)の研究以来、同じく腹節が5節のコブスジコガネの近くに位置付けられてきた。近年の研究でもこの位置付けはほぼ踏襲されており、後翅脈や交尾器、幼虫形態をも検討した CROWSON (1967)の研究においてもコブスジコガネ科に近縁であるとされている。筆者も腹部や後翅脈、交尾器等を調べたが、科としての独立性に疑問の余地はなく、コブスジコガネ科に近縁な独立の科と思われる。

コガネムシ上科における本科への検索表を次に示す。この検索表は、CROWSON (1967)、IABLOKOFF-KHUNZORIAN (1977)、森本 (1986)等を参考にして作成した。

コガネムシ上科の科の検索

- 1. 腹部は見かけ上5節2
- 腹部は見かけ上6節5
- 2. 大顎は大きく前方に通常水平に突出し、背面から見て明瞭。腹部は厚みがあり、側面から見て腹節は見える。爪間板は2本またはそれ以上の毛を具える。触角片状節はしばしば3節以上3
- 大顎は小さく通常下方または斜下を向き、背面から見て頭楯に隠れるか僅かに先が見える。腹部は側面から腹節が見えず、上翅側辺下方に後退する。爪間板を欠くか、小さくて無毛。触角片状節は3節4
- 3. 触角は柄節が通常長く、2節との接続は膝状。触角を前方に巻き込むことができず、片状節も密



図10. トカマンマルコガネの丸まった状態。

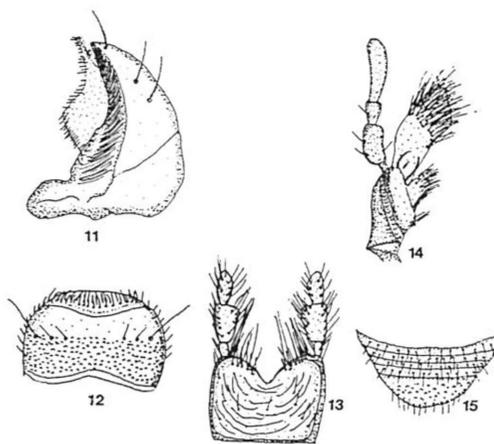


図11~15. サキシマンマルコガネ。

11:大顎; 12:上唇; 13:下唇; 14:小顎; 15:腹節。

着できない。下唇基節は前縁中央に切れ込みを欠き、通常下唇ひげ及び舌の基部は下唇基節に隠れる。後翅脈は臀脈と肘脈との間に2脈を具え、中脈と肘脈との連結脈は明瞭(図4, 20)

-クワガタムシ科 Lucanidae
- 触角は柄節が目立って長くはなく、2節との接続は膝状でない。触角を前方に巻き込むことができ、片状節は密着する。下唇基節は前縁中央に深い切れ込みを具え、下唇ひげ及び舌は露出しその切れ込みの先に位置する。後翅脈は臀脈と肘脈との間に1脈しかなく、中脈と肘脈との連結脈を欠く(図5, 21)クワガタムシ科 Passalidae
- 4. 体は伸縮できず、球状にできない。口器は頭楯の下に位置し深い溝によって分離しない。触角は10節。小楯板は小さく形に変化が多い。腹節は平坦で側縁は鋭い角稜を具える。中・後脛節は板状にならない。後翅脈は臀脈と肘脈の間に1~2脈を具える。中脈と肘脈の連結脈は明瞭(図6, 22)
-コブスジコガネ科 Trogidae
- 体は伸縮でき、頭・前胸背・上翅を内側に折曲げ完全に球状にできる。口器は頭楯の下に位置するが深い溝によって明らかに頭楯から分離する。触角は9~10節。小楯板は大きく三角形。腹節はさほど平坦ではなく側縁に鋭い角稜を具えない。腹節の硬化の程度は低い。中・後脛節は板状に広がり特に後脛節はしばしば大きく三角形に広がる。後翅脈は臀脈と肘脈の間に1脈具え、中脈と肘脈の連結脈は弱いが明瞭で、消失することもある(図2, 3, 23)
-マンマルコガネ科 Ceratocanthidae
- 5. 触角は8~11節で球部は変化に富む。後翅脈は変化に富むが臀脈と肘脈の間に通常1脈具え、しばしば欠損もしくは2本具えることもある(図7, 8, 9, 24, 25)コガネムシ科 Scarabaeidae (以下次号に続く)

○オオイチモンジシマゲンゴロウ山形県の記録

本州オオイチモンジシマゲンゴロウ (*Hydaticus pacificus conspersus* REGIMBART) は稀な種と考えられていたが、近年その報告が目につくようになってきた。県内では 43 年前に故白畑孝太郎氏の記録を含め、県外の殆どの報告は灯火によるものであり池からの記録は非常に少ない。

今回、小生は同じ水溜から 2 回 4 頭を採集できたので、その環境および山形県産の計測値を報告しておくたい。

〈記録〉酒田市金生沢 1♂ (a), 23. ix. 1991

同 2♂♂ (b, c) 1♀ (d), 29. ix. 1991

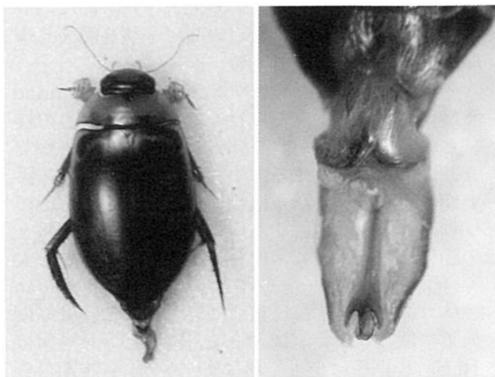
〈計測値〉a: L=1.87 W=0.99 L は体長

b: L=1.92 W=0.96 W は上翅最大幅

c: L=1.81 W=0.95

d: L=1.79 W=0.97

〈生息環境〉池より流れ出る水路の水溜で葦原の隙になっており、日陰の場所には生息していたが、1 m 離れた日向の水溜では発見できなかった。この場所にはトウホクサンショウウオやオタマジャクシ、



コオイムシなどのほか、比較的少ないオオヒメゲンゴロウの姿が多く見られた。葦原は湿地となっており、周辺の水温は高いためか 1 ケ所以外では発見できなかった。また、池からまったくゲンゴロウを発見することも出来なかった。

(山形県酒田市, 桜井俊一)

○ナツミカンの腐熟果より採集したエンマコガネ類

ナツミカン *Citrus natudaidai* の腐熟した果実の果肉中およびその下の土上から多数のエンマコガネを採集したが、本邦では記録としてはないようであり、腐熟果実一個から得られた例としては個体数もやや多いので報告しておく。

集来していた果実は、ナツミカンの木陰の地面に落下した後、自然に腐熟醱酵したもので表面はオリブ色に変色しており柑橘類特有の香りもほとんど消え失せていたが、煉り状になったその内側の果肉に多数食い入っていた。まわりには結実後に落下したナツミカンが何個も転がっていたが、腐熟しているものは 1 個のみであった。

Onthophagus atripennis WATERHOUSE コブマルエンマコガネ 19♂♂26♀♀

Onthophagus ater WATERHOUSE クロマルエンマコガネ 1♂

東京都葛飾区青戸公団, 5. viii. 1991, 筆者採集。

なお他にアカマダラケシキスイ、カクコガシラハネカクシなどの甲虫類も少数ながら見出された。

(東京都葛飾区, 玉置眞司)

○シギゾウムシ数種の記録

1. ヒシガタシギゾウムシ *Shigizo rhombiformis* MORIMOTO

現在まで奄美大島、沖縄島、宮古島、西表島から分布が知られていたが、筆者らは石垣島でガジュマルより多数採集した。

50 頭, 石垣島平野, 17. v. 1990, 筆者ら採集。

2. キモトシギゾウムシ *Labaninus kimotoi* (MORIMOTO)

九州および奄美大島に分布する稀な種で、小島は奄美大島でカマツカより採集した。また、台湾においてもこの種に近縁な *L. plicatulus* (HELLER) をカマツカより 2 頭採集した。

3 頭, 奄美大島名音川林道, 22. iii. 1991, 小島採集。

3. シロモンチビシギゾウムシ *Curculio clarus* NORSU

九州、奄美大島、徳之島、沖縄本島に分布する比較的少ない種である。小島は本種を 3~4 月にかけて奄美大島、沖縄本島でシイの花よりいくつか採集した。本種は春のこの時期に咲く花に飛来するようである。

3 頭, 奄美大島ふれあいの森, 28. iii. 1990, 奥島雄一採集; 1 頭, 奄美大島赤土山, 21. iii. 1991, 小島採集; 1 頭, 奄美大島湯湾岳, 17. iii. 1991, 小島採集; 1 頭, 沖縄島与那覇岳, 1. iv. 1991, 小島採集。

4. ウスミドリシギゾウムシ *Curculio rai* MORIMOTO

石垣島のみから知られている稀な種であるが、筆者らは同島のガジュマルより本種を採集することができた。なお、5 月にガジュマルをすくっていると、同時にヒシガタシギゾウムシも採集できたが、ヒシガタシギゾウムシに比べると本種は個体数が少なく、また、行動はきわめて敏速であった。

12 頭, 石垣島平野, 17. v. 1990, 筆者ら採集。

平野は石垣島の最北端に位置し、当地はそのほとんどが放牧地に利用され、樹林は沢刈いなどにわずかにみられるに過ぎないが、筆者らはそのわずかに残された樹林で採集を行ったものである。なお、当地においてライトトラップを試みたところイシガキトゲウスバカミキリが 1 頭、得られたことを付記しておく。

5. イヌビワシギゾウムシ *Curculio funebris* (ROELOFS)

従来、本州、四国、九州、伊豆大島から分布が知

られ、イヌビワを食樹とする普通種であるが、筆者らは南西諸島で採集された本種の標本を保持しているので記録しておく。本種は普通、体色は黒色で体を覆っている鱗片は白色であるが、九州以南の個体では体色が褐色になるものや、鱗片が黄白色になる個体がみられた。

1頭、石垣島オモト岳, 2. v. 1989, 樹本雅身採集; 1頭、石繩島与那覇岳, 6. iv. 1990, 野中俊文採集; 1頭、与那国島宇良部岳, 2. iv. 1990, 小島採集; 1頭、石垣島オモト岳, 3. v. 1990, 樹本雅身採集; 2頭、奄美大島赤土山, 21. iii. 1991, 小島採集; 4頭、奄美大島音川林道, 22. iii. 1991, 小島採集; 4頭、奄美大島仲間, 25. iii. 1991, 小島採集; 7頭、屋久島小島, 27. iii. 1991, 小島採集。

末筆ながら、いつも貴重な標本を提供して下さる東京農大の野中俊文氏、奥島雄一氏、樹本雅身氏に厚くお礼申し上げる。

(東京農大、小島弘昭; 環境指標生物、早川浩之)

○マルコガタノゲンゴロウの記録

マルコガタノゲンゴロウ *Cybister lewisianus* SHARP はきわめてまれな種で、とくに近年の記録はほとんどない。筆者らは、本種を次のように採集しているので報告する。

1♂1♀, 山形県山形市滝平, 9. x. 1988, 記野採集, 1♂1♀, 同一データ, 長谷川採集。

採集地は山形市西方の丘陵地にある小さな池で、すでに故白畑孝太郎氏により記録されているが、近年の採集記録を聞かないので記録しておきたい。

1♂, 秋田県仁賀保町冬師, 5. x. 1991, 記野採集; 1♀, 同一データ, 長谷川採集。

大きな溜池の横のやや浅い水草の生えた池の水際から採集した。

最後に、発表をお勧め下さった阿部光典氏に厚くお礼申し上げる。

(東京都杉並区、記野直人; 同三鷹市、長谷川 洋)

○ネジロカミキリの横浜市緑区の記録

〈田園都市線甲虫シリーズ その6〉

筆者らは、失われつつある田園都市線沿線の甲虫の調査を積極的に行なっており、その結果を筆者の一人大木は、本紙に「田園都市線甲虫シリーズ」として発表してきた。今回、ネジロカミキリ *Pogonocherus (Eupogonocherus) seminiverus* BATES を下記のように採集しているので記録しておきたい。

1頭、神奈川県横浜市緑区新治, 2. v. 1991, 大木採集; 1頭、同上, 6. v. 1991, 日下部採集。

本種は、Yokohama (横浜)、Hiogo (兵庫?) を模式産地として 1873 年に BATES により記載された種であるが神奈川県下における採集例は多くなかった。

大木は、飛行中の個体を、日下部は、ヤマウコギのピーティングによりそれぞれ採集した。

本種は、早春にタラノキの新芽に集ることがよく知られているが同地では、従来 Host として記録の

なかったタラノキと同じウコギ科のヤマウコギも Host としている可能性が高いと思われる。

末筆ながら、本種の神奈川県における記録についてご教示下さった神奈川県逗子市の露木繁雄氏に厚くお礼申し上げる。

参考文献

- BATES, H. W., 1873. On the longicorn Coleoptera of Japan. *Ann. Mag. nat. Hist.*, (4), 12: 380-390.
小島圭三, 他, 1986. 日本産カミキリ食樹総目録, 336 pp. 比婆科学教育振興会.
草間慶一, 他, 1984. 日本産カミキリ大図鑑. 565 pp., 96 pls. 講談社, 東京.
露木繁雄, 他, 1981. 神奈川県産カミキリ目録. 神奈川県昆虫調査報告書, 419-454. 神奈川県教育委員会. (横浜市緑区, 大木 裕; 同港北区, 日下部良康)

○福島県におけるハガクビナガゴミムシの記録

ハガクビナガゴミムシ *Odacantha hagai* NEMOTO, 1989 は、近年に発見された注目すべきクビナガゴミムシで、基産地は茨城県石岡市の霞ヶ浦である。今後、関東各地における追加記録が予想されるが、筆者は本種を福島県の浜通地方で採集したので報告する。

2頭、福島県相馬市松川郷, 22. v. 1991.

生息地は風光明媚で知られる松川浦に接したアン原で、潮止めの内側にある淡水区域である。アンの根ぎわにみられ、原記載にも付言されているように、ナカグロキバネクビナガゴミムシ *O. puziloi* SOLSKY, チャバネクビナガゴミムシ *O. aegrota* BATES と共に得られた。ハガクビナガゴミムシは、これら2種より小型で、上翅の色彩的特徴も明らかに異なり、生息現場でも一見して識別できる。

(千葉県船橋市、笠原須磨生)

○ナツミカンの腐熟果下の土中よりコブマルエンマコガネ幼虫・蛹を発見

筆者は落下したナツミカン腐熟果に來集しているエンマコガネ類成虫に関して報告したが、ナツミカン腐熟果下の土中よりコブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis* WATERHOUSE の幼虫および蛹も発見し、コブマルエンマコガネが世代をととしてナツミカン *Citrus natudaidai* の腐熟果肉も食物としていることが判明したので追加報告しておく。発見場所は成虫を腐熟果肉から採集したところと同じで、自然落下したナツミカンの腐熟果実が十個以上転がっている内の表面が青カビなどに覆われていないもので、十分腐熟し、つぶれたアンパンのような形状をしている腐熟果の下約6~7 cm くらいの土中より終令幼虫と♂蛹が発見された。

Onthophagus atripennis WATERHOUSE

1 larva, 1 pupa (♂), 東京都葛飾区青戸公園, 29. ix. 1991, 筆者採集。

なお、10月2日にも同所で再度幼虫採集を試みたが、浅い土中よりアカマダラケシキスイの蛹もよ

び幼虫が多数見出されただけであった。

(東京都葛飾区, 玉置眞司)

○マルコガタノゲンゴロウとクロゲンゴロウが自然雑交?

1991 年 7 月 6 日, 熊本県本渡市において野外でマルコガタノゲンゴロウの雌とクロゲンゴロウの雄の雑交と思われる事例を観察し, また室内でも観察できたので報告する。

同日午後 4 時頃, 本渡市内のかなり広い溜池において水生昆虫の採集を行っていたところ, 池が 15 cm ほどに浅くなった部分 (木陰で水草が繁茂していた) にクロゲンゴロウと思われる種の交尾個体が見いだされた。しばらく観察していたが 2 頭は静かに水面に浮いているほかは特に動きを見せなかった。この 2 頭を水網で掬ったところ, 上になっていた個体, 即ち雄の個体は確かにクロゲンゴロウであったが, 雄に隠れて見えなかった下の個体はマルコガタノゲンゴロウの雌であった。これら 2 頭を含めて, クロゲンゴロウ 2 雄, マルコガタノゲンゴロウ



クロゲンゴロウ♂(上)とマルコガタノゲンゴロウ♀(下)の交尾を示す(室内)

ウ 1 雌を生かしたまま持ち帰り, 底面が 30 cm × 17 cm の水槽に飼っていたところ, 翌日再びこの 2 種は雑交していた。交尾個体は前日の 2 頭と同一と思われる。この状態で写真を撮影した(写真)。

ゲンゴロウ類の自然雑交はあまり報告例がないようであるが, 今回観察した 2 種はサイズがほとんど同じで, 生息環境も似通っているのだから, 野外ではしばしば起こるトラブル(?)であるかもしれない。

(九州大学農学部昆虫学教室, 野村周平)

○多摩川河川敷におけるヨツボシゴミムシ類の追加記録

多摩川河川敷におけるヨツボシゴミムシ類については, 本誌 94 号において沢田和宏氏によりオオヨツボシゴミムシが東京都日野市より, また, ニッポンヨツボシゴミムシが東京都稲城市より記録されている。

筆者も多摩川河川敷において採集されたヨツボシゴミムシ類 4 種を所有しているので記録する。デー

タは下記のとおりである。

ヨツボシゴミムシ *Panagaus japonicus* CHAUDOIR

2 頭, 東京都昭島市拝島橋下流右岸, 28. ii. 1987, 筆者採集; 3 頭, 東京都昭島市拝島橋上流右岸, 11. xi. 1987, 筆者採集。

クビナガヨツボシゴミムシ *Tinoderus singularis* (BATES)

1 頭, 東京都立川市日野橋下流左岸, 7. v. 1987, 筆者採集; 2 頭, 東京都昭島市拝島橋上流左岸, 8. viii. 1987, 筆者採集。

オオヨツボシゴミムシ *Dischissus mirandus* BATES

1 頭, 東京都昭島市拝島橋下流右岸, 11. ii. 1987, 北山健司採集; 2 頭, 東京都昭島市拝島橋下流右岸, 11. xi. 1987, 筆者採集。

ニッポンヨツボシゴミムシ *Dischissus japonicus* ANDREWES

1 頭, 東京都昭島市拝島橋下流右岸, 11. ii. 1987, 北山健司採集。 (東京都世田谷区, 山崎裕志)

○シロオビチビヒラタカミキリ伊豆神津島の記録

山地のノブドウやサルナシなどの枯れ蔓にきわめて普通に見られるシロオビチビヒラタカミキリ *Phymatodes (Paraphymatodes) albicinctus* (BATES) も, 島嶼の記録は少なく, 佐渡および宮島, 対馬, 屋久島の採集例と, 藤田 (1979) による伊豆大島の未発表資料の引用が知られているだけである。本種の島嶼における追加記録として, 伊豆諸島の神津島からの分布を以下に報告しておきたい。

2♂♂1♀, 伊豆諸島神津島焼山, 19. x. 1982, 幼虫採集 (寄主植物: ノブドウ), 10~12. v. 1984, 羽化脱出, 新里達也採集・保管。

神津島焼山付近では, 本種はノブドウの枯れ蔓に少なくはないが, 本州の山地部のように高密度で寄生していることはない。高桑 (1979) が指摘しているように, 伊豆諸島における本種の分布は「本州から伊豆半島を経由した南下種」と考えられるが, 大島—神津島間に位置する新島などの 3 島からは, これまでに報告されていない。新島においては, 幼虫がノブドウの樹皮下を食入し, 本種とほぼ同じ生態的地位にある, ツヤケシヒゲナガコバネカミキリ *Molorchoepania mizoguchii* (HAYASHI) が優勢的に分布することで, 競合に負けた本種が絶滅したことは容易に想像されるが, 残る 2 島についてはあまりわかっていない。新島と類似したカミキリ相を持つ式根島では, 私が行った 3 回の調査の範囲では両種とも分布していなかった。利島についてはどうだろうか。どなたか調べてみて欲しい。

引用文献

- 藤田 宏, 1979. 伊豆諸島のカミキリ分布一覧表. 月刊むし, (104): 42-43.
高桑正敏, 1979. 伊豆諸島のカミキリ相の起源. 月刊むし, (104): 35-40.

((株)環境指標生物, 新里達也)

○沖縄本島から初記録のゾウムシ2種

1. クロオビアシプトゾウムシ *Heterendaeus miyamotoi* MORIMOTO は1962年に奄美大島から1♀のみにより記載された稀な種である。筆者は本種を沖縄本島から採集したので記録しておく。

2頭, 沖縄県国頭村大國林道, 25. x. 1991, 筆者採集; 1頭, 沖縄県国頭村大國林道, 25. x. 1991, 榎本雅身採集; 5頭, 沖縄県国頭村与那覇岳, 1. xi. 1991, 筆者採集。

本種は3月下旬の奄美大島においても, 今回の沖縄本島においても日当たりの良いシイ類の葉上より採集された。

2. ヒラシマシギゾウムシ *Curculio hirashimai* MORIMOTO は現在までに, 日本からは石垣島, 西表島から記録されている。筆者は本種を沖縄本島から採集したので記録しておく。

1頭, 沖縄県与那原町与那原, 28. x. 1991, 筆者採集。

この個体は, 住宅地の中にはえていた実のついたガジュマルより採集された。

末筆ながら, 貴重な標本を提供して下さった東京農大の榎本雅身氏にお礼申し上げます。

参考文献

MORIMOTO, K., 1962. *J. Fac. Agri. Kyūshū Univ.*, 11 (4): 384-385.

— 1981. *Esakia*, (17): 115-116.

(東京農大, 小島弘昭)

○北海道初記録のゴミムシ1種

筆者は北海道未記録種のムネミゾマルゴミムシ *Caelostomus picipes japonicus* TSCHITSCHÉRINE を採集したので報告したい。

1頭, 北海道上川郡新得町岩松, 16. viii. 1991.

採集地は十勝川上流部で, 同地に甲虫の夜間採集に訪れ他のゴミムシ類と共に灯火によって採集した。

報告に当たり種々御教示を頂き, 同定を頂いた層



雲峽博物館館長保田信紀氏, 旭川市松本英明氏に感謝申し上げます。(北海道河西郡, 伊藤勝彦)

○テンリュウメダガチビカワゴミムシの北海道における記録

筆者の手にテンリュウメダガチビカワゴミムシ *Asaphidion tenryuense tenryuense* HABU, 1954 の標本がある。

珍しい種であり, 北海道より初記録と思われるのでここに報告する。

〈採集記録〉北海道羊蹄山: 真狩登山口3合目付近 1♂, 31. vii. 1982, 筆者採集



この北海道産の個体に基づいて簡単に計測値を示しておきたい。

体長=4.1 mm, 鞘翅の縦溝は1~6条あり。

PW/PL=1.07 PW/PA=1.33 EL/EW=1.70

EyW/HA=3.13

(PW: 前胸幅 PL: 前胸長 PA: 前胸背前縁幅 EW: 上翅幅 EL: 上翅長 EyW: 複眼幅 HA: 前頭幅)

末筆ながら, 発表を勧められた和泉敦夫氏と同定の労をとられた森田誠司氏に厚くお礼申し上げます。

参考文献

土生和申・井上寿, 1962. 北海道で採集された *Asaphidion* の1種について, ならびに日本に産する *Asaphidion* の種の検索表. *昆虫学評論*, 14: 21-22.

(山形県酒田市, 桜井俊一)

○アシプトゾウムシの採集記録

アシプトゾウムシ *Endaeus nipponicus* Voss et CHŪJŌ, 1960 は, 新潟県焼峰山産の標本を基に記載されたが, 稀な種のように, それ以降の記録はほとんどないものと思われる。筆者はこれまで未記録であった北海道を含む数カ所で採集された本種を保持しているので記録しておく。

1♀, 岡山県川上村蒜山高原, 1~3. vii. 1988, 西山

明, 善場荘八採集; 1♀, 福井県勝山市法恩寺山, 27. v~2. vi. 1989, 善場採集; 1♂, 千葉県勝浦市興津, 14~16. vii. 1989, 西山, 善場採集; 2♀♀, 北海道千歳市協和, 29. v. 1991, 筆者採集.

なお, 個体により全体黒色で触角柄節および付節が暗赤褐色のもの(福井県産), さらに前腿節・脛節が黄褐色のもの(岡山県産, 北海道産), 全体が黄褐色のもの(千葉県産)などの色彩に変異がみられるが, 単なる個体変異であろうと考えている.

終りに, いつも貴重な標本を提供して下さいる西山明, 善場荘八の両氏, 文献でお世話になった東京農大の小島弘昭氏にお礼申し上げます.

参考文献

Voss, E., & M. Chûjô, 1960. *Niponius*, 1 (3): 3-4.
(環境指標生物, 早川浩之)

◇例会報告◇

1991年第4回例会を12月15日(日)午後1:30より東京上野・国立科学博物館4階の実験講義室で行ないました.

講演は, 佐藤正孝氏(名古屋女子大学)による「ソ連ウラジオストーク訪問採集談」.

これまでうかがい知ることのできなかった沿海州の自然とソ連研究者との交流が, 多数のスライド映写によって語られました. また, 同行した齋藤明子氏(千葉県立中央博物館)が採集品のスライドを添えて補足説明をされ, いずれも参会者の興味を呼びました.

因に, 上野俊一氏(国立科学博物館)を代表とする訪ソ団の滞在中に世界を驚かせたソ連政界のクーデターが勃発, 気掛りなことでしたが, 相応の成果を挙げて無事帰国されたことは喜びにたえません.

少憩後の一人一話は, いつもながら多彩な話題が提供され, 和やかな雰囲気の中に午後5:00散会いたしました. 参加者45名.

例会に続き, 恒例の忘年会を上野駅前の「酔月」で午後6:00より行ないました. 遠来の森本 桂氏(九州大学)の乾杯の辞をもって開宴, 一年を締める楽しき歓談に時を過ぎました. 席上, これも恒例の文献オークションを行ない, 稀観本を含む多数の文献を競売, 収益はすべて会務の資とすべく即刻同席の会計幹事に託されました. 文献類をご寄贈いただいた穂積俊文, 黒沢良彦, 佐藤正孝, 田添京二, 山

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました. その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております.

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6
振替 東京(3) 21129
電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)
FAX (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社

崎秀雄の諸氏, ならびに購買にご協力いただいた各位に厚く御礼申し上げます. 参加者36名.

(例会担当, 笠原須磨生)

◇第15回名古屋支部会報告◇

1991年3月10日, 名古屋支部会が愛知県貿易館で開催された. 毎年3月に開き, 第1回は草間会長をお招きして開かれ, 以来15回続いてきた. 今回は地元の大平仁夫氏が退官され, 御苦労様と申し上げ, この機会にお話をうかがうことになった. 穂積俊文:「愛知県の昆虫」発行後の初記録の甲虫について.

大平仁夫: コメツキムシの話.

以上の講演の他に, 各自が標本や文献を持ち寄って一人一話を行った.

散会後は例によって初寿司で懇親会が開かれた.



参加者氏名(アイウエオ順): 青木哲郎, 岩塚博, 井野川重則, 大平仁夫, 太田克人, 大沢省三, 大塚 篤, 蟹江 昇, 河路掛吾, 桐山 功, 佐藤正孝, 清水清市, 高井 泰, 竹内克豊, 内藤通孝, 長谷川道明, 伏原隆明, 穂積俊文, 松井幸一, 山本雅人. (穂積記)

◇『甲虫ニュース』原稿募集◇

日本鞘翅学会

会費(一ヶ年)5,000円, 次号は1992年6月下旬発行予定

発行人 上野俊一

発行所 日本鞘翅学会 東京都新宿区百人町3-23-1
国立科学博物館昆虫第1研究室

電話(3364)2311, 振替東京8-401793

印刷所 (株)国際文献印刷社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥6,200, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,870, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3個以下 ¥1,300, 4個以上 ¥850(以下同様), 第2地帯 ¥1,500, ¥950, 第3地帯 ¥1,700, ¥1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています. カタログを御請求下さい. (¥60)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島2-21-25
電話(03)3811-4547, 振替6-113479